詠む広場

毎日俳壇

井上　康明　選

穂芒に埋れし妻を見失ふ
奈良市　上田　秋霜

△評▽風が吹いて、同行の妻の声が消え、姿が見えなくなってしまった。ススキ原は、穂を揺らしながら波をたてているばかりだ。

百年の孤独読み了へ星月夜
鳥取　馬野慎一郎

△評▽「百年の孤独」はガルシア・マルケスの長編小説。一族7代の幻想的な物語に満天の星が瞬く。

初紅葉集へば笑ひ声絶えず
平塚市　日下　光代

ぎす鳴くや石の貨幣に穴一つ
弥富市　富田　範保

畦みちの小春の光浴びゆけり
姫路市　板谷　繁

這ふやうに進み来るなり枯蟷螂
久喜市　利根川輝紀

きちきちの総身翅となりて飛ぶ
東京　望月　清彦

回廊に一騎当千菊人形
常陸大宮市　笹沼　實

独り身に明るき柚子の一つかな
市川市　高野　厚夫

谷底に案山子の墓場ありにけり
島根　重親　峡人

片山由美子　選

見失ひもう見つからぬ帰り花
鎌ケ谷市　海野　公生

△評▽たった一輪のはかなげな帰り花を見つけた、と思った途端にどこかにまぎれてしまった。「もう」が決め手の一句。

犬も児も見つめてゐたる冬夕焼
相模原市　はやし　央

△評▽幼児や犬が風景に見入ることなどないと思っていたのに。生あるものの切なさがにじむ。

呼ぶ声も応ふるこゑも霧の中
川越市　峰尾　雅彦

雨音のして寝付かれず十三夜
和歌山市　宮本　啓子

誰も来ぬ日の裏庭の秋海棠
小平市　齋藤　幸枝

いくたびも雲通り過ぐ花野かな
大阪市　隠樹ノリエ

背伸びして窓拭きをれば鳥渡る
米子市　岩水　節子

古墳へと続く坂道秋ざくら
神奈川　新井たか志

冬めくや指先の傷ひりひりと
東京　横尾　惠子

百日草のみ咲く畑となりにけり
羽生市　今成　公江

小川　軽舟　選

仰ぎ見る空秋空に如くはなし
北九州市　西川　一二

△評▽仰ぎ見るなら秋空に及ぶものはない。はればれと言い切った格調の高さが、秋晴れの澄みわたる空にふさわしい。

ブラウスの小さき花柄小鳥来る
さぬき市　景山　典子

△評▽気に入って買ったブラウスなのだろう。小鳥にまで祝福されるような気分になった。

野辺送り雨の花野を戻り来ぬ
東京　金谷　白道

傘立てに古き釣竿秋深し
京田辺市　加藤　草児

貼り紙に閉店を知る夜寒かな
川崎市　折戸　洋

数珠玉や逆縁の子の墓の供花
上尾市　山口　流離

新藁に拭かれ立ちたる子牛かな
郡山市　寺田　秀雄

雁啼くや父の形見の古机
浜松市　久野　茂樹

後の月散らかる雲を照らしつつ
長岡市　勝沼　幸子

ニュータウンの森に還る日草の花
兵庫　青木　朋子

西村　和子　選

車椅子老襁宜のせて在祭
高山市　直井　照男

△評▽在祭は村の鎮守の収穫祭といった趣のものだから、親しい神職を取り囲む住人たちの姿や笑顔が見えてくるようだ。

美男美女ばかりにあらず菊人形
松山市　井上　保子

△評▽場面によっては勇猛な武士や、ゆかしげな僧侶なども。むしろそちらの方にひかれる。

山門に佇てば四方より秋の声
唐津市　河児　紀子

二人ゐて記憶まちまち柚子かぼす
小田原市　林　梢

菊よりも菊人形の香りけり
北本市　萩原　行博

後より来る秋風と歩みけり
いわき市　四宮　公男

二杯目のコーヒー釣瓶落しかな
久喜市　うちの音呉

秋深し淋しさいまに始まらず
大阪市　吉田　昌之

バス停にネクタイ外す虫の夜
東広島市　福岡　宏

京都駅ゼロ番ホーム秋深む
葛城市　山本　啓

新刊

＜句集＞

◇石田郷子『万の枝』　第4句集。以前の句集に引き続き静かな文体ながら、俳諧味あり、写生句ありで、読者をしっかりつかむ。△汝（な）に教（おし）ふ冬青空といふことば▽△倒木の荒々しさよ初暦▽△ほうたるを待つ横顔に加はりぬ▽（ふらんす堂・2970円）

◇岩田奎『田中裕明の百句』　鑑賞書。△水遊びする子に先生から手紙▽などで知られる田中裕明の句につき、自由に鑑賞したもの。早世した俳人の作品に対する感嘆を込めながらも、冷静にかつ華やかに評した点が驚異に値する。（ふらんす堂・1650円）

◇山下由理子『風の楯（たて）』　第2句集。言葉の的確な把握および奇をてらうことのない句集全体のやわらかさに目を見張る。△枯蓮（かれはす）の水を支へに立ち尽す▽△遥（はる）かなるものに呼ばれて揚雲雀（あげひばり）▽△なじみたる頃になくしぬ革手套（かわしゅとう）▽（ふらんす堂・3080円）

（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇久々湊盈子『加藤克巳の百首』　長い伝統の短歌にいかに新しい感覚を生かすか、新鮮な詩精神とは何かをひたすら探求した加藤克巳。21冊の単行歌集から選んだ歌を鑑賞して全体像を伝える。△いつしかにルドンの眼（まなこ）のぼりいて神宮の森にふくろうのなく▽（ふらんす堂・1870円）

◇本多稜『時剋（じこく）』　胃に腫瘍が見つかった2022年から1年間の闘病生活を詠む。アスリートとしての姿も見せて家族と歌を支えとした日々に胸をうたれる。△一首作りわが細胞を一つ増やすがんに取られたら取り返すべく▽（本阿弥書店・2200円）

◇宮川聖子『空のために飛ぶ鳥』　陶器の町・岐阜県多治見市に在住の著者の第2歌集。口語を用いてやわらかな叙情性の歌。△残らない言葉重ねて笑い合うミルフィーユの端さらに崩して▽△生きるとは陶片握り燃えるまで豊蔵志野の緋色（ひいろ）の夕日▽（書肆侃侃房・2200円）

（歌人・中川佐和子）